

## 青年期の自己概念と対人態度, 社会意識, 価値観との関係

筑波大学心理学系

加藤 隆 勝

筑波大学大学院(博)心理学研究科

高木 秀 明

意識体験としての自己の内容分析を画期的に発展させた研究者としては、第1に Rogers をあげなければならぬであろう。その理論の特色は、自己概念が個人の行動を決定する frame of reference としての機能をもつことを重視するところにある。つまり、人間の行動は、その個人の自己概念と密接な関連をもつのであり、その個人の自己概念を知ることによって、彼の行動を一層よく理解し、予測することが可能となる。また、自己概念の転換・再構成によって行動の適切な変容をもたらす、人格の改善を促すことが可能となる、という立場をとるのである (Rogers, 1951; Rogers & Dymond, 1954)。Rogers らの理論は、臨床的領域から出発したものであるが、そこにとどまらず、人格形成の基本的理論として発展し、特に、自己概念の安定性や自己受容が適応の指標となることが実証的に確かめられてきている。

ところで、自己概念が適応と関連するという場合、適応の概念の中には、人間関係を含めた社会的環境への適応という意味が当然含まれてくると考えられる。したがって、自己受容は他者の受容 (acceptance of others) と関連をもつことが予想されるし、もっと一般的に言えば自己概念と対人態度の間には一定の相関関係が成立するものと予想される。

この点について独自の理論を展開したのは Fromm (1947) である。Fromm は近代文化においては、自己自身に対する愛は利己主義と同義であり、他者への愛とは矛盾するものであるという考えが存在することを述べ、その誤りを強調している。彼によれば、自己への愛と他者への愛がたがいに両立しない、二者択一的な問題として扱われることは本来矛盾したことであり、人間としての自己自身の成熟と独自性の尊重は他者に対する尊敬と愛と理解から切り離せないものであるとする。そして「利己的な人は、他者を愛することができない、ということは事実であるが、しかし同時に彼は、自分自身をも愛することができないのである」(谷口・早坂訳, 160ページ)と述べている。

Fromm の見解は「自己受容」と「他者受容」、あるいは「自己概念」と「対人態度」は共通の基盤をもつものであることを説明しているが、Rogers らの適応理論

の発展とともに、この点を実証的に明らかにしようとする試みがかかり行われている (加藤, 1960)。

たとえば、Sheerer (1949) や Stock (1949) らは心理療法の過程にあるクライアントの自己受容(自己態度)と他者受容(他者態度)の関係を検討し、両者の関係を確かめている。また、Phillips (1951) および Berger (1952) は大学生など多数の正常人を対象に調査して Sheerer らが臨床的場面で確認した原理をひろく一般にも適用可能であることを明らかにしている。ただし、McIntyre (1952) や Fey (1955) の研究では、質問紙によって測定された自己受容と他者受容の間には正の相関がみられ、かつ他者からも受容されていると感ずる傾向が強いが、これと「他者による実際の受容」との間には積極的な相関がみられないことが示されている。しかし、菅 (1975) がソシオメトリーによって対他者関係良好群と不良群を構成して、self-esteem の得点を比較した結果では、小学生、中学生、高校生とも、良好群は不良群よりも「現実自己」および「理想自己」の両者において self-esteem 得点が高くなる傾向を示している。

他者受容あるいは対人態度における他者は、一般的他者を前提にしていると考えられるが、他者への態度は具体的にはその他者との社会的距離によって規定されるであろうし、また他者の示す態度によっても変容するものと考えられる。これらについては、わが国では梶田 (1980) によってくわしい検討が試みられている。また、これとは逆に、他者への態度は自我の発達水準によっても異なることが予想される。近年では Marcia (1966) の設定した自我同一性地位と対人態度との関係を検討する試みも発表されている (Donovan, 1975)。

自己-他者の関係は、このように検討すべき課題を多く残しているが、これまでのところ、一般的には、自己受容と他者受容、あるいは自己概念と対人態度との基本的な関連を支持する結果が多く得られているといえよう。しかし、両者の関係の把握の仕方は質問紙調査に限ってみても、きわめて大まかなものが多く、自己概念の内容構成の分析や対人態度の特質・構造の分析に基づいて両者の関係を検討したものはほとんど見当たらない。また、両者の関係が発達段階によって異なるかどうかにつ

いての検討も十分積み重ねられているとはいいがたいのが現状である。

さて、自己受容と他者受容、自己概念と対人態度が相関関係にあるということは、自己の認知における変化は他者に対する認知の変化をとめない、さらには社会的環境についての認知の変化をとまなうことを意味すると考えられる。したがって、この点を推し進めるならば、自己概念と社会態度、社会意識も一定の対応関係にあることが予想される。

この点に関しては、古くは Brownfain (1952) や Pearl (1954) らによって自己概念とエスノセントリズムの関係が検討されている。また、最近では、 Dickstein & Hardy (1979) のように、self-esteem と善行爲の関係を検討しているものや、Clair & Day (1979) のように、自我同一性水準と価値態度との関係を検討しているものもみられる。いずれも自己概念が社会態度や価値観と関連をもつことを示唆する結果を得ているといえる。また加藤 (1977) は、現在の日本社会および将来の日本社会を肯定的受容的にとらえているか、否定的拒否的にとらえているかの観点から青年の社会イメージを調べ、それと自己受容、自己批判などの関連を検討している。その結果、高校男子では自己受容指数、自己批判指数と「現在の社会のイメージ」との間に有意な相関が得られたのに対し、大学男子では「将来の社会のイメージ」との間に有意な相関が得られている。また、高校女子においては、自己受容、自己批判と社会イメージの間に有意な相関はみられなかったが、大学女子の場合は、自己受容指数、自己批判指数と「現在の社会のイメージ」および「将来の社会のイメージ」の間にいずれも有意な相関が得られている。発達段階や性による差がみられるが、自己概念と社会イメージとの関連が確かめられたといえる。

以上のように、これまでの研究結果は自己概念と社会態度、社会意識あるいは価値観との関連を示唆しているものが多いのであるが、問題点としては、全体として研究の数が少ない上、自己概念や社会意識等の測定内容、測定方法、対象者が研究ごとに異なるため、結果の一般化や研究相互の比較考察が困難であることがあげられる。したがって、今後の研究の集積を通して解明されなければならない点が多い。

本研究では、以上述べてきた点を踏まえて、自己概念、対人態度、社会意識、価値観について、それぞれの構成内容を分析した上で、その測定尺度を作成し、これを中学生、高校生、大学生（価値観については大学生のみ）に実施し、自己概念と対人態度、社会意識、価値観との関係を総合的に分析することを目的とする。

## 方 法

### 1. 尺度の構成

本研究に関連して、われわれは合計7つの尺度を作成した。すなわち、(1) 自己概念尺度（加藤・高木, 1980 e）、(2) 独立意識尺度（加藤・高木, 1980 d）、(3) 対人態度尺度（加藤・高木, 1980 b）、(4) 情動的共感性尺度（加藤・高木, 1980 a）、(5) 社会認知尺度（高木・吉田・加藤, 1980）、(6) 社会イメージ尺度（高木・吉田・加藤, 1980）、(7) 価値観（生き方）尺度（加藤・高木, 1980 c）である。対人態度に関しては一般的な態度の測定とあわせて情動的な側面を共感性尺度を通して測定することとし、社会意識に関しては認知的な側面とあわせて情動的な側面をイメージ尺度を通して測定することとした。

各尺度の作成手続きおよび各尺度を用いての青年の測定結果については、すでに学会等で発表しているので詳細は省略し、以下に各尺度別に下位尺度の構成を示しておく。なお、具体的な質問内容は付表に一括して示すことにする。

#### (1) 自己概念尺度

- 尺度Ⅰ 反社会性（10項目）
- 尺度Ⅱ 意欲性・活動性（10項目）
- 尺度Ⅲ きちようめんさ・清潔さ（10項目）
- 尺度Ⅳ 明朗性・友好性（10項目）
- 尺度Ⅴ 情緒性（10項目）
- 尺度Ⅵ 誠実さ（10項目）

#### (2) 独立意識尺度

- 尺度Ⅰ 独立性（10項目）
- 尺度Ⅱ 親への依存（5項目）
- 尺度Ⅲ 反抗・内的混乱（5項目）

#### (3) 対人態度尺度

- 尺度Ⅰ 信頼・愛情（5項目）
- 尺度Ⅱ 対立（5項目）
- 尺度Ⅲ 同調・依存（5項目）
- 尺度Ⅳ 孤独（5項目）

#### (4) 情動的共感性尺度

- 尺度Ⅰ 感情的暖かさ（10項目）
- 尺度Ⅱ 感情的冷淡さ（10項目）
- 尺度Ⅲ 感情的被影響性（5項目）

#### (5) 社会認知尺度

- 尺度Ⅰ 社会的平等・公正・福祉（10項目）
- 尺度Ⅱ 社会的連帯・希望（5項目）
- 尺度Ⅲ 個人の自由・権利（5項目）

社会認知については、この3尺度を用いて「現在の日本の社会」と「望ましい日本の社会」の2つの観点について測定した。

#### (6) 社会イメージ尺度（20項目）

社会イメージについては，SD法により「現在の日本の社会」と「将来(20～30年後)の日本の社会」の2つの観点について測定した。

#### (7) 価値観(生き方)尺度

- 尺度Ⅰ 愛他・自己抑制型(2項目)
- 尺度Ⅱ 受動・安定型(2項目)
- 尺度Ⅲ 現実社会志向型(2項目)
- 尺度Ⅳ 能動的改善型(2項目)
- 尺度Ⅴ 内面志向型(2項目)
- 尺度Ⅵ 積極的社会参加型(2項目)
- 尺度Ⅶ 柔軟多様型(2項目)
- 尺度Ⅷ 平穩充足型(2項目)

#### 2. 調査対象および調査期間

価値観以外の尺度については，都内の公立中学校(5校)2年生，都内の公立高校(2校)および私立高校(1校)2年生，首都圏の国立大学(3校)学生を対象にした。その際に，中学・高校生については，同一の対象者に自己概念，独立意識，対人態度，情動的共感性，社会認知，社会イメージのすべての尺度を実施することは，回答に要する時間を考慮すると困難な事情にあった。したがって中学，高校生については，自己概念，独立意識，対人態度，情動的共感性の各尺度を実施する群(A群)と，自己概念，独立意識，社会認知，社会イメージの各尺度を実施する群(B群)とを設けた。大学生(C群)については，自己概念，独立意識，対人態度，情動的共感性，社会認知，社会イメージのすべての尺度を同一の対象者に実施することができた。以上の調査は1978年12月～1979年1月に実施した。

なお，価値観尺度については，首都圏の国立大学(1校)，公立大学(1校)，および私立大学(1校)の学生(D群)を対象にして自己概念尺度とともに実施した。

Table 1 調査対象者数

	中学生		高校生		大学生		合計
	A群	B群	A群	B群	C群	D群	
男子	118	94	132	131	140	269	884
女子	86	88	95	65	106	106	546
合計	204	182	227	196	246	375	1430

A群：自己概念尺度，独立意識尺度，対人態度尺度，情動的共感性尺度を実施。

B群：自己概念尺度，独立意識尺度，社会認知尺度，社会イメージ尺度を実施。

C群：自己概念尺度，独立意識尺度，対人態度尺度，情動的共感性尺度，社会認知尺度，社会イメージ尺度を実施。

D群：自己概念尺度，価値観尺度を実施。

この調査の実施期間は1980年4月～1980年6月である。

調査対象者数の内訳は Table 1 に示してあるが，総数は1430名である。

#### 3. 分析の観点

分析1では，自己概念と他の変数との関係を Pearson の偏差積率相関係数を用い，中学，高校，大学生それぞれ男女別に検討した。ただし，自己概念と独立意識との関係は加藤・高木(1980d)の中ですでに検討されているので，本研究では省略した。また，自己概念と情動的共感性との関係についてもすでに報告されている(加藤・高木，1980a)ので，本研究では省略した。

分析2では，大学生(C群)について，自己概念の各尺度を目的変数とし，独立意識，対人態度，情動的共感性，社会認知，社会イメージの各尺度を説明変数とした重回帰分析を行った。自己概念と独立意識および情動的共感性との相関関係はすでに発表しているので分析1では省略したが，重回帰分析は今回初めての試みなので独立意識と情動的共感性も説明変数の中に加えてある。また価値観については他の説明変数の被験者と異なるので除かれた。

#### 分析 1

##### 1. 自己概念と対人態度の相関

Table 2 に自己概念尺度と対人態度尺度の相関を示す。

自己概念の尺度Ⅰ(反社会性)と対人態度の関係を検討すると，男子では，中学生，高校生，大学生とも尺度Ⅰ(信頼・愛情)との間に有意な負の相関がみられ，尺度Ⅱ(対立)および尺度Ⅳ(孤独)との間には有意な正の相関がみられる。また，高校生，大学生の場合は，尺度Ⅲ(同調・依存)との間にも有意な正の相関がみられる。女子においては，中学生，高校生，大学生とも尺度Ⅱ(対立)との間の相関は有意な正の数値を示している。また，高校生，大学生の場合は尺度Ⅰ(信頼・愛情)との相関(負)も有意となっている。しかし，尺度Ⅲ(同調・依存)および尺度Ⅳ(孤独)との間には男子のように一貫した傾向は認められない。尺度Ⅲ(同調・依存)との相関は中学生においてのみ有意であり，尺度Ⅳ(孤独)との相関は大学生においてのみ有意である。

このように，男子においては，自己を反社会的とみならずものは，他者への「信頼・愛情」が少なく，他者と対立的であると意識する傾向が示されているが，同時に他者への同調性・依存性や孤独傾向との関連も示されているのが特質である。これに対して女子の場合は，「反社会性」は他者への同調性・依存性や孤独傾向とは一般に関連をもたないのが特質である。ただし，中学生のみが他者への対立とともに同調性・依存性とも有意な相関を示していること，大学生のみが孤独傾向との間に有意な

Table 2 自己概念尺度と対人態度尺度の相関係数

		自己概念尺度 対人態度尺度	I 反社会性	II 意欲性・ 活動性	III きちょう めんさ・ 清潔さ	IV 明朗性・ 友好性	V 情緒性	VI 誠実さ
中 学 生	男 子	I 信頼・愛情	-.33**	.34**	.33**	.40**	.21*	.35**
		II 対立	.45**	.11	-.19*	-.05	.21*	-.24**
		III 同調・依存	.18	-.31**	-.19*	.06	.32**	.01
		IV 孤独	.21*	-.12	.01	-.41**	.16	.04
	女 子	I 信頼・愛情	-.07	.39**	.26*	.55**	.26*	.38**
		II 対立	.53**	.28**	-.15	.02	.43**	-.37**
		III 同調・依存	.25*	-.28**	-.14	.15	.34**	-.12
		IV 孤独	.00	-.22*	.11	-.50**	.09	.02
高 校 生	男 子	I 信頼・愛情	-.43**	.56**	.41**	.47**	.02	.54**
		II 対立	.39**	.16	-.21*	.03	.28**	-.16
		III 同調・依存	.33**	-.50**	-.29**	.06	.37**	-.20*
		IV 孤独	.27**	-.30**	-.23**	-.66**	.08	-.27**
	女 子	I 信頼・愛情	-.22*	.52**	.02	.59**	.12	.27**
		II 対立	.38**	.25*	.05	-.14	.09	-.09
		III 同調・依存	.10	-.33**	-.30**	.13	.24*	.01
		IV 孤独	.15	-.35**	.14	-.67**	-.09	.06
大 学 生	男 子	I 信頼・愛情	-.31**	.50**	.31**	.38**	.06	.40**
		II 対立	.53**	.12	-.19*	-.17*	.25**	-.32**
		III 同調・依存	.28**	-.45**	-.32**	-.09	.45**	-.11
		IV 孤独	.33**	-.31**	-.01	-.69**	.12	-.14
	女 子	I 信頼・愛情	-.40**	.38**	.22*	.47**	-.07	.42**
		II 対立	.48**	.26**	-.08	-.20*	.05	-.34**
		III 同調・依存	-.06	-.52**	.05	.14	.27**	.07
		IV 孤独	.22*	-.19	.19	-.59**	.03	-.11

\* P &lt; .05, \*\* P &lt; .01

相関を示していること、は女子における発達傾向を知る上で興味深い。

自己概念尺度II(意欲性・活動性)と対人態度尺度の関係を検討すると、尺度I(信頼・愛情)との相関係数はいずれも有意な正の数値を示し、尺度III(同調・依存)との相関係数はいずれも有意な負の数値を示している。また、高校生、大学生においては、尺度IV(孤独)との間にも有意な負の相関が示されている。これに対し、女子の場合は、尺度I(信頼・愛情)および尺度II(対立)との間にはいずれも有意な正の相関、尺度III(同調・依存)との間にはいずれも負の相関が示されている。また中学生、高校生においては尺度IV(孤独)との間にも有意な負の相関がみられる。

「意欲性・活動性」は他者への「信頼・愛情」と関連し、他者への「同調・依存」および「孤独」傾向とは負の相関関係にあることは男女とも共通している。しかし

男子の場合は、意欲的・活動的であることと、他者と対立的であることとの間にはほとんど関係がみられないのに対し、女子の場合は両者の間に有意な相関がみられる。女子が意欲的・活動的であることのむずかしさを示唆するものといえよう。

自己概念尺度III(きちょうめんさ・清潔さ)と対人態度尺度との関係をみると、男子では尺度I(信頼・愛情)との相関係数はいずれも有意な正の数値を示し、尺度II(対立)および尺度III(同調・依存)との相関係数はいずれも有意な負の数値を示している。また高校生においては尺度IV(孤独)との間にも有意な負の相関がみられる。これに対して、女子の場合は対人態度との間に男子ほど一貫した関係が認められない。有意な相関は、中学生と大学生における尺度I(信頼・愛情)との相関(正)、高校生における尺度III(同調・依存)との相関(負)のみである。

Table 3 自己概念尺度と社会認知尺度の相関係数

		社会認知尺度		自己概念尺度			Ⅳ 明朗性・友好性	Ⅴ 情緒性	Ⅵ 誠実さ
				Ⅰ 反社会性	Ⅱ 活動性	Ⅲ きちよう・めんさ・清潔さ			
中 学 生	男	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.13	.07	.15	.08	.01	.13
			II 社会的連帯・希望	-.16	.07	.13	.10	-.05	.12
			III 個人の自由・権利	-.05	.17	.07	.10	.00	.16
	女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	-.03	-.06	.05	.07	-.11	-.01
			II 社会的連帯・希望	.00	.01	.02	.02	.00	.08
			III 個人の自由・権利	-.04	-.02	-.02	.10	-.18	-.08
高 校 生	男	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.27*	-.12	.32**	-.03	-.18	.11
			II 社会的連帯・希望	-.06	.13	.16	.17	.06	.04
			III 個人の自由・権利	-.18	.09	.12	-.08	-.14	.17
	女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	-.01	.38**	-.04	.16	.10	.11
			II 社会的連帯・希望	-.19	.20	-.05	.30**	.10	.17
			III 個人の自由・権利	-.04	.38**	.02	.14	.10	.16
大 学 生	男	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.08	.01	.07	.07	-.03	.05
			II 社会的連帯・希望	.02	-.08	.04	.07	-.01	.04
			III 個人の自由・権利	-.10	.02	-.02	-.11	-.01	.00
	女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	.03	.01	-.11	.02	.00	.19*
			II 社会的連帯・希望	-.01	-.21*	.05	.15	.19*	.09
			III 個人の自由・権利	.01	.07	-.08	-.01	-.02	.11
大 学 生	男	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.21	-.18	.09	.15	.08	.30*
			II 社会的連帯・希望	-.22	.21	.02	.33**	-.04	.22
			III 個人の自由・権利	-.08	.02	.02	.12	-.05	.19
	女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	-.06	-.07	.19	-.07	-.04	.02
			II 社会的連帯・希望	-.30*	-.03	.27*	.19	.01	.33**
			III 個人の自由・権利	-.05	-.05	.02	-.11	-.12	-.08
大 学 生	男	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.15	-.02	.14	.08	.05	.04
			II 社会的連帯・希望	-.13	.00	.09	.18*	.12	.10
			III 個人の自由・権利	-.25**	-.18*	.16	.04	-.11	.12
	女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	.03	-.06	-.10	-.01	-.01	-.02
			II 社会的連帯・希望	-.13	.04	.00	.17*	-.02	.01
			III 個人の自由・権利	-.04	-.02	-.06	.05	.02	.04
女	現在の社会	I 社会的平等・公正・福祉	-.06	.07	.05	.14	.09	.10	
		II 社会的連帯・希望	.11	.10	-.15	-.05	.00	-.03	
		III 個人の自由・権利	.01	.09	.06	.14	.04	.14	
女子	社会 望ましい	I 社会的平等・公正・福祉	.05	.06	-.24*	.27**	-.08	.07	
		II 社会的連帯・希望	-.02	-.10	-.04	.15	.01	.09	
		III 個人の自由・権利	-.01	.11	-.09	.18	-.08	.09	

\* P &lt; .05, \*\* P &lt; .01

Table 4 自己概念尺度と社会イメージ尺度の相関係数

		自己概念尺度 社会イメージ尺度	I 反社会性	II 意欲性・ 活動性	III きちよう めんさ・ 清潔さ	IV 明朗性・ 友好性	V 情緒性	VI 誠実さ
中 学 生	男 子	現在の社会のイメージ	-.12	.10	.02	.16	-.11	.06
		将来の社会のイメージ	-.19	.08	.10	.14	-.20	.07
	女 子	現在の社会のイメージ	-.19	-.09	.13	.09	.02	.10
		将来の社会のイメージ	-.25*	.13	.18	.35**	-.16	.14
高 校 生	男 子	現在の社会のイメージ	-.02	-.10	.13	.11	.03	.13
		将来の社会のイメージ	-.08	-.08	.09	-.01	.00	.06
	女 子	現在の社会のイメージ	-.07	-.02	.11	.05	-.03	.21
		将来の社会のイメージ	-.04	-.10	.00	.07	.02	.11
大 学 生	男 子	現在の社会のイメージ	-.18*	-.07	.17*	.10	-.02	.21*
		将来の社会のイメージ	-.18*	.02	.18*	.06	-.04	.22*
	女 子	現在の社会のイメージ	-.03	.25**	.04	.12	-.12	-.04
		将来の社会のイメージ	-.03	.21*	-.05	.04	-.05	-.08

\* P&lt;.05, \*\* P&lt;.01

Table 5 自己概念尺度と価値観尺度の相関係数

		自己概念尺度 価値観尺度	I 反社会性	II 意欲性・ 活動性	III きちよう めんさ・ 清潔さ	IV 明朗性・ 友好性	V 情緒性	VI 誠実さ
大 学 生 ・ 男 子	I 愛他・自己抑制型		-.36**	.08	.22**	.11	-.03	.34**
	II 受動安定型		.21**	-.08	-.20**	.00	.00	-.18**
	III 現実社会志向型		-.22**	.12*	.12*	.19**	-.01	.22**
	IV 能動的改善型		-.10	.21**	.09	.27**	.08	.15*
	V 内面志向型		-.01	.05	.15*	-.08	.07	.04
	VI 積極的社会参加型		-.11	.11	.03	.09	.05	.09
	VII 柔軟多様型		-.01	-.08	-.05	.03	-.02	.05
	VIII 平穏充足型		-.04	-.08	.04	.01	.03	.09
大 学 生 ・ 女 子	I 愛他・自己抑制型		-.24*	.02	.09	.01	-.21*	.07
	II 受動安定型		-.10	-.16	.03	-.06	-.06	-.03
	III 現実社会志向型		-.12	-.01	.05	.17	.02	.02
	IV 能動的改善型		-.16	.05	.02	.14	-.07	-.05
	V 内面志向型		.02	-.08	.03	-.11	.18	-.03
	VI 積極的社会参加型		.00	-.04	-.11	.03	-.12	.05
	VII 柔軟多様型		-.16	-.07	.07	-.01	-.13	-.02
	VIII 平穏充足型		-.13	-.11	.09	-.05	-.02	-.08

\* P&lt;.05, \*\* P&lt;.01

「きちょうめんさ・清潔さ」は男子においては対人態度の特質と関係をもっているが、女子においては一般に関係が少ないといえよう。

自己概念尺度Ⅳ（明朗性・友好性）と対人態度尺度との関係をみると、男女の傾向はきわめて類似している。すなわち、尺度Ⅰ（信頼・愛情）とは性、年齢にかかわらず、すべて有意な正の相関を示し、尺度Ⅳ（孤独）との間はすべて有意な負の相関になっている。また大学生は男女とも尺度Ⅱ（対立）との間に有意な負の相関を示している。

「明朗性・友好性」が他者への「信頼・愛情」とかわり、「孤独」とは相反する傾向にあることは、日常の経験的な認識とよく一致しているといえよう。

自己概念尺度Ⅴ（情緒性）と対人態度尺度との関係をみると、男子では中学生、高校生、大学生とも尺度Ⅱ（対立）および尺度Ⅲ（同調・依存）との間に有意な正の相関が示されている。対立と同調という相反する傾向に対し、ともに関連をもっているわけで、両者に共通するのは人格的に未成熟な傾向ということも可能であろう。これに対して、女子の場合は、「同調・依存」との関係が中心で、尺度Ⅱ（対立）との間に有意な相関を示すのは中学生のみである。なお、中学生の段階では男女とも尺度Ⅰ（信頼・愛情）と有意な相関を示すのは興味深い。

自己概念尺度Ⅵ（誠実さ）と対人態度尺度との関係をみると、中学生、高校生、大学生の男女とも尺度Ⅰ（信頼・愛情）との間に有意な正の相関を示し、中学生および大学生の男女は尺度Ⅱ（対立）との間に有意な負の相関を示している。このほか男子高校生は尺度Ⅲ（同調・依存）および尺度Ⅳ（孤独）の間にも有意な負の相関を示している。「誠実さ」が他者への「信頼・愛情」と関連をもち、対人的「対立」とは逆の関係にあることは当然予想されるところであったが、他者への同調性・依存性とは相関をもたないか、もしくは負の相関関係にあるという結果は、「誠実さ」の特質を明瞭にするものといえよう。

## 2. 自己概念と社会意識の相関

Table 3 および Table 4 に自己概念と社会認知および社会イメージとの相関を示す。

### (1) 自己概念と社会認知の相関

自己概念の各尺度と「現在の社会の認知」の各尺度との関係をみると、有意な相関を示すものは全体の一割に満たず、相関係数の値も小さい。したがって、自己概念と「現在の社会の認知」との関係は全般に希薄といわなければならない。また有意な相関を示したものを並べてみても、そこから一貫した特質や発達傾向を見出すのは困難でもある。

発達段階別に有意な相関の数を示すと、中学生女子2、高校生女子2、大学生男子3、それ以外は0、となる。

中学生、高校生においては女子の数が多く、大学生においては男子の数が多く結果となっている。また、尺度別では「明朗性・友好性」と「社会的連帯・希望」との間に2つの有意な正の相関がみられる。

自己概念の各尺度と「望ましい社会の認知」の各尺度との関係も基本的には、「現在の社会の認知」の場合と同様である。ただし、有意な相関の数はやや多くなり、発達段階別にみると、中学生男子0、中学生女子3、高校生男子3、高校生女子3、大学生男子1、大学生女子2、となる。「現在の社会の認知」に比べ、高校生男子の数がやや増加の傾向にあるといえる。また、「現在の社会」とよりも「望ましい社会」との関係がやや強まるといえよう。尺度別では、やはり「明朗性・友好性」と「社会的連帯・希望」との間に2つの有意な正の相関がみられる。自己を明朗・友好的とみるものは、「社会的連帯・希望」を高く評定しやすい傾向を示唆している。

### (2) 自己概念と社会イメージの相関

自己概念の各尺度と「現在の社会のイメージ」の相関をみると、社会認知の場合と同様に、有意な相関は少なく、かつ相関係数の値も小さい。自己概念と社会イメージの関係は全般に希薄といわざるをえない。ただし、有意な相関を示したのは、すべて大学生においてであり、大学生になると自己概念と社会イメージの間の関連が強まってくることを示唆している。

自己概念の各尺度と「将来の社会のイメージ」の関係は、基本的には「現在の社会のイメージ」の場合と同様であるが、有意な相関の数は若干増加している。「現在の社会」よりも「将来の社会」との関係がやや強まるといえよう。発達のみにみると、有意な相関は大学生男女とも中学生女子にもみられるのが特徴である。また、大学生男子においては、「反社会性」は「現在の社会のイメージ」および「将来の社会のイメージ」の両者と負の相関をもち、「きちょうめんさ・清潔さ」および「誠実さ」はその両者とそれぞれ正の相関をもっている。さらに大学生女子においては、「意欲性・活動性」が両者と正の相関を示している。つまり、男子においては、自己を反社会的とみるものは現在および将来の社会をnegativeに評価し、自己をきちょうめん・清潔で誠実とみるものは現在および将来の社会をpositiveに評価する傾向をもっているといえる。これに対し、女子においては自己を意欲的・活動的とみるものは現在および将来の社会をpositiveにみる傾向をもっているといえる。

## 3. 自己概念と価値観（生き方）の相関

Table 5 によって自己概念と価値観（生き方）との相関をみると、有意な相関の数は男子と女子で大きく異なることがわかる。男子の場合は、有意な相関の数が15に達するのにに対し、女子の場合はわずか2にすぎない。男子においては自己概念と価値観あるいは生き方はかなり

の関連をもっている」と解されるが、女子においては両者の関連が希薄といわなければならない。

次に、男子の結果について検討してみる。Table 5によると、自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）は価値観の尺度Ⅰ（愛他・自己抑制型）および尺度Ⅲ（現実社会志向型）との間に有意な負の相関を示し、尺度Ⅱ（受動安定型）とは有意な正の相関を示している。自己を反社会的とみなすものは、愛他的・自己抑制的な傾向が少なく、現実社会への志向が低い傾向にあるといえる。また、人生に対し受動的な姿勢をもちやすいといえる。

自己概念の尺度Ⅱ（意欲性・活動性）は価値観の尺度Ⅳ（能動的改善型）および尺度Ⅲ（現実社会志向型）との間に有意な正の相関を示している。自己を意欲的・活動的とみているものは社会の改善や現実社会での活動に積極的な傾向をもちやすいといえる。

自己概念の尺度Ⅲ（きちょうめんさ・清潔さ）は価値観の尺度Ⅰ（愛他・自己抑制型）、尺度Ⅴ（内面志向型）、尺度Ⅲ（現実社会志向型）と有意な正の相関をもち、尺度Ⅱ（受動安定型）とは有意な負の相関をもっている。自己をきちょうめん・清潔とみているものは愛他的・自己抑制的な傾向にあるが、しかし、人生に対する受動的な姿勢とは相反する傾向にあることを示している。なお「きちょうめんさ・清潔さ」は、数値は小さいが「現実社会志向」と「内面志向」の両者と関連をもっているのは興味深い。

自己概念の尺度Ⅳ（明朗性・友好性）は価値観の尺度Ⅳ（能動的改善型）および尺度Ⅲ（現実社会志向型）と有意な正の相関をもっている。この傾向は、「意欲性・活動性」においてみられた傾向とほぼ同様である。

自己概念の尺度Ⅴ（情緒性）においては、価値観の各尺度との間に有意な相関は認められない。

自己概念の尺度Ⅵ（誠実さ）は価値観の尺度Ⅰ（愛他・自己抑制型）、尺度Ⅲ（現実社会志向型）および尺度Ⅳ（能動的改善型）と有意な正の相関をもち、尺度Ⅱ（受動安定型）と有意な負の相関をもっている。自己を誠実とみているものは、愛他的・自己抑制的であり、現実社会での活動や社会の改善に積極的な傾向をもつこと、しかし人生に対する受動的な生き方とは相反する方向にあることが示されている。

女子の結果を検討すると、自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）および尺度Ⅴ（情緒性）はともに価値観の尺度Ⅰ（愛他・自己抑制型）との間に有意な負の相関を示している。自己を反社会的とみるもの、および情緒性が高いとみるものは、愛他的・自己抑制的な傾向が少ないといえる。

以上、男女別に相関関係について検討してきたが、相関は有意であっても相関係数の値はいずれも小さいのが特徴である。したがって高い相関関係にはない点にも留

意する必要がある。

#### 4. 考察

本研究では、自己概念と対人態度は一定の対応関係にあるという仮説のもとに、両者の相関関係の分析を試みたのであるが、結果的にこの仮説は支持されたといえよう。

たとえば、自己概念の「反社会性」は対人態度の「対立」と正の相関を示し、「信頼・愛情」とは負の相関をもつこと、自己概念の「意欲性・活動性」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示し、「同調・依存」とは負の相関をもつこと、自己概念の「明朗性・友好性」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示し、「孤独」とは負の相関をもつこと、自己概念の「誠実さ」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示すことなどが明らかにされた。これらの関係は日常における経験的判断と一致する方向にあるといえるが、実証的にはこれまで十分に解明されていなかった事実である。

以上のような一般的な結果のほか、性差や発達差についてもいくつかの傾向が確かめられた。たとえば、自己概念の「意欲性・活動性」と対人態度の「対立」の間には男子では相関がみられないが、女子においては相関が認められる。女子が意欲的・活動的であることは対人的対立を生みやすいことを示唆している。発達のには、大学生女子では「反社会性」が「孤独」と関連していること、中学生女子では「情緒性」が対人的「対立」と関連していることなどの事実が示されている。このように一般的な傾向とともに、男女によって異なる側面、発達の異なる側面についても分析がなされた。

本研究では、自己概念が対人態度と相関関係にあるとすれば、社会意識や価値観とも一定の対応関係にあるであろうという仮説のもとに、自己概念と社会認知および社会イメージとの相関関係の分析を試みた。しかし、自己概念と対人態度にみられたような明瞭な関係を見出すことは困難であった。

もっとも、部分的には、自己概念の「明朗性・友好性」と社会認知の「社会的連帯・希望」との相関が認められること、自己概念と社会イメージの相関は大学生になると有意になる傾向を示し、たとえば男子において自己を反社会的とみるものは社会を *negative* に評価する傾向があること、女子においては、自己を意欲的、活動的とみるものは社会を *positive* にみる傾向があることなどが明らかにされている。

しかし、全体としてみた場合、自己概念と社会意識の関連は、われわれの予想に反して、密接とはいえないのが本研究の結果である。

この事実をどのように解釈するかは今後の課題であるが、時代を越えた青年の特質として把握するのはいささか困難であろう。やはり現代青年に特有な傾向が反映さ

れているものとみななければならない。最近の青年を対象とした調査結果は，青年の保守化傾向をほぼ共通に指摘しており，青年の価値志向は私生活・個人生活における満足感に向けられ，社会的・公共的なものへの無関心，“しらけ”として表現される傾向を明らかにしている（たとえば，統計数理研究所国民性調査委員会，1975）。自己概念と社会意識の希薄な関係はこうした青年の状況と関連しているものと思われるが，この問題の解明のためには，今後さらに実証的な分析を重ねていく必要がある。

自己概念と価値観（生き方）との関係については，大学生についてのみ検討した。男子においては数値としては小さいが，多くの有意な相関が確かめられた。しかし，女子の場合は有意な相関の数はいわゆる少なく，関連はほとんど認められなかった。本研究でみるかぎり女子の場合は，自己概念は価値観ないしは生き方と直接の結びつきをもっていないといえるであろう。

以上のようにみると，男子においては，自己概念と密接な関連をもっているのは対人態度であり，次には価値観（生き方）である。そして社会意識との関係が三者の中では最も薄いのが特質である。女子の場合も，やはり対人態度との関係が最も密接である。しかし，女子においては価値観（生き方）とも，社会意識とも関係がきわめて薄いのが特質といえる。

さて，本調査で解明した諸尺度間の関係はすべて質問紙調査によるものである。つまり，被験者の意識内部の構造的関連を明らかにしたものであるといえる。したがって，意識と実際行動との関連やズレの問題は，次に着手すべき検討課題として残されているといわなければならない。

## 分析 2

### 1. 方法

自己概念と他の変数との個々の関係は分析 1 でとらえることができた。しかし分析 1 だけでは，自己概念を基準（目的）としたとき，他の変数が自己概念をどの程度予測（説明）しうるかについて，変数間の相対的重要性を明らかにすることはできなかった。そこで次に，大学生について，自己概念の各尺度を目的変数とし，独立意識，対人態度，情動的共感性，現在の社会の認知，望ましい社会の認知，現在の社会のイメージ，将来の社会のイメージの各尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。対象とした大学生（C群）に対しては価値観尺度を実施してないので，価値観を説明変数の中に組み込むことはできなかった。また分析は男女別に行った。

重回帰分析は，

$$\hat{y} = b_0 + b_1x_1 + b_2x_2 + \dots + b_nx_n$$

$$\left( \begin{array}{l} \hat{y} : \text{目的変数の予測値} \\ x_i (i=1, 2, \dots, n) : \text{説明変数} \\ b_i (i=1, 2, \dots, n) : \text{偏回帰係数} \\ b_0 : \text{定数} \end{array} \right)$$

という予測方程式によって，目的変数の予測値  $\hat{y}$  を求め，これと目的変数の実測値  $y$  との残差の平方和が最小になるように，最小 2 乗法を用いて  $b_i (i=1, 2, \dots, n)$  や  $b_0$  を求める統計的手続きである。本研究においては，説明変数の投入法は一括多重型投入法を用い， $\hat{y}$  と  $y$  の重回帰係数，その 2 乗である決定係数，偏回帰係数，定数，および標準偏回帰係数を算出した。標準偏回帰係数は，各変数を平均が 0，標準偏差が 1 になるように標準化したときの偏回帰係数にあたり，これによって説明変数間の相対的重要性を明らかにすることができる。

### 2. 結果

重回帰分析の全体的結果を Table 6 に，そのうちの重回帰係数を Fig. 1 に示す。これらを見ると，本研究で用いた説明変数は自己概念の尺度 I～VI までのどの目

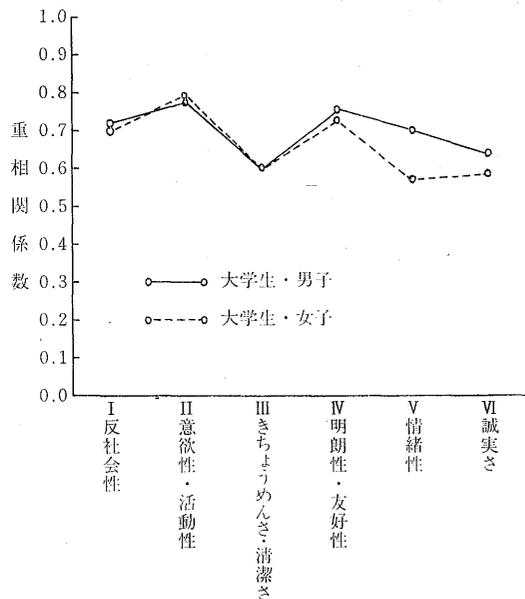


Fig. 1 自己概念の各尺度に対する重回帰係数

の変数もある程度説明しうることがわかる。その中でも比較的良好に説明されるのは，男子では尺度 I（反社会性），尺度 II（意欲性・活動性），尺度 IV（明朗性・友好性），尺度 V（情緒性）であり，女子では尺度 I，尺度 II，尺度 IV である。また尺度 V の重回帰係数には男女差がみられ，男子の方が女子よりもよく説明されることが示されている。

これらの結果は，自己概念が他の人格変数と関連を持つこと，特に，自己の「反社会性」，「意欲性・活動性」，「明朗性・友好性」の意識においてはかなりの関連を持つことを示している。また「情緒性」の意識においては男子では他の人格変数との間にかかなりの関連がみられるのに対して，女子では男子ほど高い関連がみられず，男

Table 6 重回帰分析の結果  
大学生・男子

目的変数	自己概念尺度											
	I 反社会性		II 意欲性・活動性		III さちよ・清潔さ		IV 男性・友好性		V 情緒性		IV 誠実さ	
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数
独立意識尺度 I : 独立性	-0.115	-0.142	0.397	0.489	0.095	0.117	0.181	0.233	-0.099	-0.130	0.009	0.013
独立意識尺度 II : 親への依存	-0.264	-0.219	0.024	0.020	0.325	0.267	0.176	0.152	-0.174	-0.153	0.308	0.302
独立意識尺度 III : 反抗・内的混乱	0.107	0.064	0.121	0.073	-0.092	-0.055	0.072	0.045	-0.042	-0.026	-0.200	-0.142
対人態度尺度 I : 信頼・愛情	-0.330	-0.212	0.262	0.167	0.535	0.399	0.198	0.132	0.267	0.180	0.562	0.425
対人態度尺度 II : 対立	0.693	0.489	0.143	0.100	-0.206	-0.144	-0.194	-0.142	0.332	0.247	-0.300	-0.250
対人態度尺度 III : 同調・依存	0.049	0.033	-0.098	-0.065	-0.358	-0.237	0.307	0.213	0.226	0.159	0.067	0.053
対人態度尺度 IV : 孤独	0.138	0.095	-0.263	-0.180	0.318	0.217	-0.857	-0.612	0.256	0.186	0.058	0.047
情動的共感性尺度 I : 感情的暖かさ	0.095	0.147	0.006	0.009	-0.093	-0.143	-0.042	-0.068	0.119	0.194	0.009	0.016
情動的共感性尺度 II : 感情的冷淡さ	0.030	0.049	0.066	0.108	0.019	0.030	0.032	0.054	-0.045	-0.078	0.048	0.093
情動的共感性尺度 III : 感情的被影響性	0.058	0.057	-0.174	-0.169	0.073	0.071	-0.127	-0.129	0.339	0.352	-0.020	-0.023
現在の社会の認知尺度 I : 社会的平等・公正・福祉	0.007	0.013	-0.032	-0.057	-0.038	-0.068	-0.045	-0.085	0.145	0.278	-0.079	-0.170
現在の社会の認知尺度 II : 社会的連帯・希望	0.030	0.026	0.030	0.025	0.027	0.022	0.002	0.002	0.210	0.186	-0.105	-0.104
現在の社会の認知尺度 III : 個人の自由・権利	-0.062	-0.073	-0.064	-0.075	0.109	0.127	0.011	0.013	-0.094	-0.117	0.087	0.121
望ましい社会の認知尺度 I : 社会的平等・公正・福祉	0.085	0.207	-0.042	-0.101	-0.067	-0.162	-0.013	-0.033	-0.020	-0.052	-0.004	-0.011
望ましい社会の認知尺度 II : 社会的連帯・希望	-0.059	-0.057	0.090	0.087	0.009	0.008	0.069	0.070	0.102	0.105	-0.136	-0.157
望ましい社会の認知尺度 III : 個人の自由・権利	-0.160	-0.121	-0.027	-0.020	0.031	0.023	0.041	0.032	-0.030	-0.023	0.082	0.073
現在の社会のイメージ尺度	-0.007	-0.029	0.012	0.047	0.037	0.148	0.008	0.032	-0.049	-0.209	0.050	0.241
将来の社会のイメージ尺度	-0.007	-0.086	-0.020	-0.105	0.009	0.049	-0.010	-0.052	-0.010	-0.056	0.015	0.094
定数	13.893		8.677		9.861		22.997		-0.809		12.068	
重相関係数	0.718		0.778		0.596		0.754		0.699		0.639	
決定係数	0.515		0.605		0.356		0.568		0.489		0.409	



女における「情緒性」意識の相違が示されている。

次に、各尺度ごとに、標準偏回帰係数の絶対値が0.2以上の説明変数をあげる。Table 6をみると、尺度I(反社会性)では、男女ともに0.2以上の値を示すものとして次の3つがあげられる。

対人態度尺度I(信頼・愛情:男子 -0.212, 女子 -0.455)

対人態度尺度II(対立:男子 0.489, 女子 0.385)

望ましい社会の認知尺度I(社会的平等・公正・福祉:男子 0.270, 女子 0.355)

男子だけに0.2以上の値を示すものとして、

独立意識尺度II(親への依存:男子 -0.219)があげられる。

以上のことは、他人に対する「信頼・愛情」の不足、「対立」的態度、望ましい社会における「社会的平等・公正・福祉」に対する要求、さらに男子においては「親への依存」意識の欠如が、反社会的自己概念と関係することを示している。またその中でも、男子においては、「対立」的態度の値が特に高く、反社会的自己概念との密接な関連を示している。女子では「信頼・愛情」の欠如が相対的に最も高い値を示しているが、他の2変数も高い値を示している。

尺度II(意欲性・活動性)では、男女に共通するものとして、

独立意識尺度I(独立性:男子 0.489, 女子 0.291)があげられ、女子だけに高い値を示すものとして次の3つがあげられる。

対人態度尺度I(信頼・愛情:女子 0.246)

対人態度尺度II(対立:女子 0.272)

対人態度尺度III(同調・依存:女子 -0.253)

男子は「独立性」だけが「意欲性・活動性」と密接に関連するのに対して、女子では「独立性」のほかに、「信頼・愛情」、「対立」、「同調・依存」の欠如、が「意欲性・活動性」と関連を示すのが特徴である。

尺度III(きちょうめんさ・清潔さ)では、男女に共通するものとして次の2つがあげられる。

対人態度尺度I(信頼・愛情:男子 0.339, 女子 0.314)

対人態度尺度IV(孤独:男子 0.217, 女子 0.262)

男子だけに高い値を示すものとして次の2つがあげられる。

独立意識尺度II(親への依存:男子 0.267)

対人態度尺度III(同調・依存:男子 -0.237)

女子だけに高い値を示すものとして次の4つがあげられる。

情動的共感性尺度I(感情的暖かさ:女子 -0.286)

情動的共感性尺度II(感情的冷淡さ:女子 -0.257)

望ましい社会の認知尺度I(社会的平等・公正・福

祉:女子 -0.537)

望ましい社会の認知尺度III(個人の自由・権利:女子 0.263)

以上の中で、男子では「信頼・愛情」が「きちょうめんさ・清潔さ」とやや密接な関連を示し、女子では望ましい社会における「社会的平等・公正・福祉」に対する期待の欠如が「きちょうめんさ・清潔さ」とかなり密接な関連を示している。

尺度IV(明朗性・友好性)では、男女に共通するものとして、

対人態度尺度IV(孤独:男子 -0.612, 女子 -0.466)があげられ、男子だけに高い値を示すものとして次の2つがあげられる。

独立意識尺度I(独立性:男子 0.233)

対人態度尺度III(同調・依存:男子 0.213)

女子だけに高い値を示すものとして次の2つがあげられる。

対人態度尺度I(信頼・愛情:女子 0.284)

望ましい社会の認知尺度I(社会的平等・公正・福祉:女子 0.257)

男女ともに「孤独」の欠如が「明朗性・友好性」と密接な関連を示しているのが特徴である。

尺度V(情緒性)では、男女に共通するものではなく、男子だけに高い値を示すものとして次の4つがあげられる。

対人態度尺度II(対立:男子 0.247)

情動的共感性尺度III(感情的被影響性:男子 0.352)

現在の社会の認知尺度I(社会的平等・公正・福祉:男子 0.278)

現在の社会のイメージ尺度(男子 -0.209)

女子だけに高い値を示すものとして次の3つがあげられる。

独立意識尺度III(反抗・内的混乱:女子 0.274)

情動的共感性尺度I(感情的暖かさ:女子 0.377)

情動的共感性尺度II(感情的冷淡さ:女子 -0.291)

以上の中で、男子では「感情的被影響性」が「情緒性」と密接な関連を示し、女子では「感情的暖かさ」が「情緒性」と密接な関連を示している。

尺度VI(誠実さ)では、男女に共通するものとして次の2つがあげられる。

対人態度尺度I(信頼・愛情:男子 0.425, 女子 0.449)

対人態度尺度II(対立:男子 -0.250, 女子 -0.321)

男子だけに高い値を示すものとして次の2つがあげられる。

独立意識尺度II(親への依存:男子 0.302)

現在の社会のイメージ尺度(男子 0.241)

男女ともに「信頼・愛情」が「誠実さ」と密接な関連

Table 7 自己概念との相関係数の絶対値が0.3以上の変数の標準偏回帰係数

目的変数	大 学 生 ・ 男		大 学 生 ・ 女		標準偏回帰係数
	説明変数	相関係数	説明変数	相関係数	
I 反社会性	対人態度尺度II (対立)	0.53	対人態度尺度II (対立)	0.48	0.385
	独立意識尺度III (反抗・内的混乱)	0.41	対人態度尺度I (信頼・愛情)	-0.40	-0.455
	対人態度尺度IV (孤独)	0.33	独立意識尺度III (反抗・内的混乱)	0.38	0.145
	対人態度尺度I (信頼・愛情)	-0.31			
II 意欲性・活動性	独立意識尺度I (独立性)	0.66	独立意識尺度I (独立性)	0.64	0.291
	情動的共感性尺度III (感情的被影響性)	-0.52	対人態度尺度III (同調・依存)	-0.52	-0.253
	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.50	情動的共感性尺度III (感情的被影響性)	-0.43	-0.074
	対人態度尺度III (同調・依存)	-0.45	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.38	0.246
III きちようめんさ ・清潔さ	対人態度尺度III (同調・依存)	-0.32			
	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.31			
IV 明朗性・友好性	対人態度尺度IV (孤独)	-0.69	対人態度尺度IV (孤独)	-0.59	-0.466
	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.38	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.47	0.284
V 情緒性	情動的共感性尺度III (感情的被影響性)	0.51	情動的共感性尺度I (感情的暖かさ)	0.34	0.090
	対人態度尺度III (同調・依存)	0.45	情動的共感性尺度III (感情的被影響性)	0.37	0.016
IV 誠実さ	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.40	対人態度尺度I (信頼・愛情)	0.42	0.449
	対人態度尺度II (対立)	-0.32	対人態度尺度II (対立)	-0.34	-0.321

を示しているのが特徴である。

最後に、自己概念との相関係数の絶対値が0.3以上の変数の標準偏回帰係数を Table 7 に示す。これを見ると、相関係数においては自己概念と高い関連を示す変数も、他の変数と共に重回帰分析にかけられると必ずしも高い関連を示すとは限らないことがわかる。このことは2変数間の関連が固定したものではなく、その時の視点や枠組によって変化することを示している。

### 3. 考察

重回帰分析の最も特徴的な結果として、自己概念に対しては、一般に、対人態度尺度や独立意識尺度の標準偏回帰係数が高く、社会認知尺度や社会イメージ尺度の標準偏回帰係数が低いという傾向が示されている。このように、自己概念は対人態度や独立意識と密接なつながりをもっているが、社会意識との関係は薄いとみることができる。この結果は分析1の結果と同様である。

次に、男女差に関して最も特徴的な結果は、「情緒性」における男女差である。これは重相関係数においても、標準偏回帰係数においても示されている。男子の「情緒性」は本研究で用いた変数によってかなり説明されるのに対して、女子の「情緒性」はそれほど説明されない。女子の「情緒性」には、本研究でとりあげた変数以外にもまだ多くの関連する変数の存在が考えられる。このことは女子の「情緒性」の複雑さを示すものといえよう。また個々の説明変数との関連でみても、男子の「情緒性」は「感情的被影響性」と関連するのに対し、女子の「情緒性」は「感情的暖かさ」や「感情的冷淡さ」と関連するのが特徴である。すなわち、男子の「情緒性」は消極的、受動的で、外にあまり表出されないのに対して、女子の「情緒性」は積極的、能動的で、外に表出される傾向があるといえよう。「情緒性」に関しては従来から男女差の存在が指摘されているが、本研究によってその違いの具体的内容が多少明らかにされたといえることができる。

次に特徴的なのは、「反社会性」において標準偏回帰係数に現われた男女差である。男子の「反社会性」は「対立」的態度と関連するのに対して、女子の「反社会性」はむしろ「信頼・愛情」的態度の欠如と関連することが示されている。このことから、男子の場合には積極的で、表出的な「反社会性」が予想されるのに対し、女子の場合には積極性の欠如としての「反社会性」が予想される。この点も男女の相違の一側面を示すものとして興味深いものであろう。

そのほか、男女に共通する特徴として、「孤独」の欠如が「明朗性・友好性」と密接に関連し、「信頼・愛情」が「誠実さ」と関連する点などは、「明朗性・友好性」や「誠実さ」の内容を考える上で参考になるものと考えられる。

### 要 約

本研究は、中学生、高校生、大学生、計1430名を対象に以下の7尺度を実施し、自己概念と他の尺度との関係を総合的に分析することを目的としている。

測定尺度

- (1) 自己概念
- (2) 独立意識
- (3) 対人態度
- (4) 情動的共感性
- (5) 社会認知
- (6) 社会イメージ
- (7) 価値観(生き方)

本研究の結果は分析1および分析2によって検討された。

#### 分析1

自己概念と他の尺度との関係を Pearson の相関係数を用いて検討した。ただし、自己概念と独立意識の関係、および自己概念と情動的共感性の関係はすでに発表されているので本研究では省略した。主な結果は次の通りである。

- (1) 本研究によって自己概念と対人態度は一定の対応関係にあることが示された。たとえば、
  - ① 自己概念の「反社会性」は対人態度の「対立」と正の相関を示し、「信頼・愛情」とは負の相関を示す。
  - ② 自己概念の「意欲性・活動性」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示し、「同調・依存」とは負の相関を示す。
  - ③ 自己概念の「明朗性・友好性」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示し、「孤独」とは負の相関を示す。
  - ④ 自己概念の「誠実さ」は対人態度の「信頼・愛情」と正の相関を示す。

などである。

- (2) 上記の一般的関係のほか、いくつかの発達差、性差が確かめられた。
- (3) 自己概念と社会認知および社会イメージとの間には、部分的には有意な相関が確かめられたが、全体としてみた場合、密接な関連は認められなかった。
- (4) 自己概念と価値観(生き方)との関連は大学生についてのみ検討されたが、男子においては、数値としては小さいが多くの有意な相関が確かめられた。女子においては、両者の関連はほとんど認められなかった。

#### 分析2

大学生について、自己概念と他の5尺度との関係を重回帰分析を用いて検討した。ただし、対象とした大学生に対しては価値観尺度を実施してないので、価値観尺度

は除かれた。主な結果は次の通りである。

- (1) 分析1で確認された自己概念と対人態度の対応関係は，分析2でも確認された。たとえば，
- ① 自己概念の「反社会性」は対人態度の「信頼・愛情」の欠如や「対立」と関係をもつ。
  - ② 自己概念の「明朗性・友好性」は対人態度の「孤独」の欠如と関係をもつ。
  - ③ 自己概念の「誠実さ」は対人態度の「対立」の欠如や「信頼・愛情」と関係をもつ。
- などである。
- (2) 自己概念と社会認知および社会イメージとの関係については，分析1と同様に部分的な関係はみられたが全体としては密接な関係は認められなかった。
- (3) 自己概念と独立意識については，自己概念の「意欲性・活動性」と独立意識の「独立性」との間に密接な関係が示された。
- (4) 自己概念と情動的共感性については，自己概念の「情緒性」が，男子では情動的共感性の「感情的被影響性」と，女子では「感情的冷淡さ」の欠如や「感情的暖かさ」と関係を示した。

以上の分析1と分析2から，自己概念は対人態度と密接な関係があるが，社会意識とはあまり関係がないこと，また，価値観とは男子においてのみ多くの相関がみられること，などが主な特徴として示された。

#### 引用文献

- Berger, E. M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 778-782.
- Brownfain, J. J. 1952 Stability of the self-concept as a dimension of personality. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 597-606.
- Clair, S. S., & Day, H. D. 1979 Ego identity status and values among high school females. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 317-326.
- Dickstein, E. B., & Hardy, B. W. 1979 Self-esteem, autonomy, and moral behavior in college men and women. *The Journal of Genetic Psychology*, 134, 51-55.
- Donovan, J.M. 1975 Identity status and interpersonal style. *Journal of Youth and Adolescence*, 4, 37-55.
- Fey, W. F. 1955 Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others: A reevaluation. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, 274-276.
- Fromm, E. 1947 *Man for himself*. New York: Rinehart. (谷口隆之助・早坂泰次郎訳 1955 人間における自由 創元新社)
- 梶田毅一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1960 自己意識の分析による適応の研究 心理学研究, 31, 53-63.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 (心理学モノグラフ 14) 東京大学出版会
- 加藤隆勝・高木秀明 1980a 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980b 青年期における対人態度の特質と発達傾向 教育心理, 28, 495-499.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980c 「生き方」の世代差について (1), (2) 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 208-211.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980d 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980e 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, 51, 279-282.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- McIntyre, C. J. 1952 Acceptance by others and its relation to acceptance of self and others. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 624-625.
- Pearl, D. 1954 Ethnocentrism and the self concept. *The Journal of Social Psychology*, 40, 137-147.
- Phillips, E. L. 1951 Attitudes toward self and others: A brief questionnaire report. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 79-81.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Boston: Houghton.
- Rogers, C. R., & Dymond, R. F. 1954 *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago press.
- Sheerer, E. T. 1949 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in ten counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 169-175.
- Stock, D. 1949 An investigation into the interrelations between the self concept and feelings directed toward other persons and groups. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 176-180.
- 菅佐和子 1975 Self-esteem と対他者関係に関する一研究——青年期を対象として——教育心理学研究, 23, 224-229.
- 高木秀明・吉田富二雄・加藤隆勝 1980 現代青年の社会認知と社会イメージ 年報社会心理学, 21, 189-202.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(編) 1975 第3日本人の国民性 至誠堂 —1980. 9. 30. 受稿—

#### 〔後記〕

本研究を実施するにあたって，各大学，高校，中学の諸先生ならびに学生，生徒の方々に多大のご協力をいただいた。特に，東京学芸大学教授斎藤耕二，国学院大学助教授矢吹省司，静岡大学講師落合良行，横浜国立大学

助教授福田幸男, 東京都立大学講師佐久間春夫, 東京都立教育研究所主任指導主事宇井治郎, 墨田区教育委員会指導主事関根和夫, 水戸市立浜田小学校教諭今井雅人の諸先生には格別のご援助をいただいた。また, 本学では体育科学系教授松田岩男, 加賀秀夫, 同助教授市村操一,

杉原隆の諸先生に調査のため便宜を図っていただくなど大変お世話になった。心理学研究科の吉田富二雄氏には尺度作成にあたり種々ご協力いただいた。また資料整理に関しては岩崎誠子氏にお世話になった。記して謝意を表します。

## SUMMARY

### Relationships of the Self-concept with Interpersonal Attitudes, the Social Awareness, and the Sense of Values in Adolescents

Takakatsu Kato & Hideaki Takagi  
The University of Tsukuba

The purpose of this study was to clarify relations of the self-concept with the awareness of independence, interpersonal attitudes, the emotional empathy, cognitions and images of the society, and the sense of values in adolescents. The subjects were 1,430 students from junior and senior high schools and colleges.

Following subscales for the seven variables used in this study had been constructed in the prior studies :

(1) Self-concept

Subscale (I) antisocialness, (II) activeness, (III) neatness, and cleanliness, (IV) cheerfulness and friendliness, (V) emotionality, and (VI) sincerity.

(2) Awareness of independence

Subscale (I) independence, (II) dependence upon parents, and (III) disobedience and confusion.

(3) Interpersonal attitudes

Subscale (I) trust and love, (II) opposition, (III) conformity and dependence, and (IV) isolation.

(4) Emotional empathy

Subscale (I) emotional warmth, (II) emotional coolness, and (III) emotional susceptibility.

(5) Cognitions of the society

Subscale (I) social equality, justice, and welfare, (II) social solidarity and prospects, and (III) personal freedom and rights.

(6) Images of the society (consisting of one subscale of 20 items)

(7) Sense of values

Subscale (I) altruism and unselfishness, (II) passive stability, (III) orientation to the real life, (IV) positiveness for improvement, (V) orientation to the inner life, (VI) active participation in the society, (VII) flexibility and diversity, and (VIII) calm satisfaction.

Through correlational analyses and multiple regression analyses, following results were obtained :

(1) The "antisocialness" of the self-concept was positively correlated with "opposition," and negatively with "trust and love" and "altruism and unselfishness."

(2) The "activeness" of the self-concept was positively correlated with "independence" and "trust and love," and negatively with "conformity and dependence."

(3) The "neatness and cleanliness" of the self-concept was positively correlated with "trust and love."

(4) The "cheerfulness and friendliness" of the self-concept was positively correlated with "trust and love," and negatively with "isolation."

(5) The "emotionality" of the self-concept was positively correlated with "conformity and dependence," "emotional warmth," and "emotional susceptibility."

(6) The “sincerity” of the self-concept was positively correlated with “trust and love,” and negatively with “opposition.”

These findings indicate that the self-concept

is closely related with interpersonal attitudes, and very little, if any, with cognitions and images of the society.

### 付表 各尺度の質問項目

以下に各尺度の質問項目を一括して示す。ただし自己概念尺度の質問項目については他誌に発表を予定しているので省略する。

#### 1. 独立意識尺度 (20項目)

以下の各項目について「全く自分にあてはまる」, 「大体自分にあてはまる」, 「どちらともいえない」, 「あまり自分にはあてはまらない」, 「全く自分にはあてはまらない」の5段階評定で回答を求める。(一)の項目は方向が逆の項目である。なお, ふりがなはすべて省略する。

##### 尺度I 独立性 (10項目)

1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。
2. 自分自身の判断に責任をもって行動することができる。
3. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。
4. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。
5. まわりの人と意見がちがっても, 自分が正しいと思うことを主張できる。
6. 小さなことでも, 自分で決断することができない。(一)
7. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。
8. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。(一)
9. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。(一)
10. たとえ学校の成績が悪くても, 人間として, ひけめを感じることはない。

##### 尺度II 親への依存 (5項目)

1. 親といるだけで何となく安心できる。
2. 困った時は親に頼りたくなる。
3. 親は自分の心の支えである。
4. 何かする時には, 親にはげましてもらいたい。
5. 自分で決心できないときは, 親の意見に従うようにしている。

##### 尺度III 反抗・内的混乱 (5項目)

1. 両親を理解しようと思うのだが, つい反抗し, けんかになることが多い。
2. 親や先生の言うことには, たとえ正しくても反対したくなる。
3. 大人に対してひけめを感じるが多い。
4. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気には

なれない。

5. 親に対して自分の意見を主張したいが, 自信をもてない。

#### 2. 対人態度尺度 (20項目)

以下の各項目について「全く自分にあてはまる」, 「大体自分にあてはまる」, 「どちらともいえない」, 「あまり自分にはあてはまらない」, 「全く自分にはあてはまらない」の5段階評定で回答を求める。

##### 尺度I 信頼・愛情 (5項目)

1. 私は人を指導する(リードする)力がある。
2. 私は年下の人から尊敬される。
3. 私は人の気持ちを思いやる方だ。
4. 私は人に対して暖かく世話することが好きだ。
5. 私は人から頼もしい人だと思われている。

##### 尺度III 対立 (5項目)

1. 私は人と争う(けんか, 口論)ことが多い。
2. 私は一般に反抗的である。
3. 私は人に対しても自分のわがままを通したい。
4. 私は人生は戦いの場所であり, 攻撃することをためらってはいけないと思う。
5. 私は人からこわい人だと思われている。

##### 尺度III 同調・依存 (5項目)

1. 私は人生はなんとなく心細く, ひとりでは不安だと思う。
2. 私は人の言いなりになりやすい。
3. 私は人前に出ると相手に同調しやすい。
4. 私は人から甘えっ子だと思われている。
5. 私は人がいないと寂しいので, いつも人と一緒にいたい。

##### 尺度IV 孤独 (5項目)

1. 私は人から孤独な人だと思われている。
2. 私は人と会いたくないことが多い。
3. 私には社交性がない。
4. 私は人生は結局, 孤独(ひとりぼっち)なのだと思う。
5. 私はひとりでコツコツ仕事をすることを好む性格である。

#### 3. 情動的共感性尺度 (25項目)

以下の各項目について「全くそうだと思う」, 「かなり

そうだと思う」,「どちらかといえばそうだと思う」,「どちらともいえない」,「どちらかといえばちがうと思う」,「かなりちがうと思う」,「全くちがうと思う」の7段階評定で回答を求める。(一)の項目は方向が逆の項目である。

#### 尺度Ⅰ 感情的暖かさ(10項目)

1. 私は映画を見る時,つい熱中してしまう。
2. 歌を歌ったり,聞いたりすると,私は楽しくなる。
3. 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。
4. 私は動物が苦しんでいるのを見ると,とてもかわいそうになる。
5. 私は身寄りのない老人を見ると,かわいそうになる。
6. 私は人が冷遇されているのを見ると,非常に腹が立つ。
7. 私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると,かわいそうになる。
8. 私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。
9. 私は会計事務所に勤務するよりも,社会福祉の仕事をする方がよい。
10. 小さい子供はよく泣くが,かわいい。

#### 尺度Ⅱ 感情的冷淡さ(10項目)

1. 私は人がうれしくて泣くのを見ると,しらけた気持ちになる。
2. 私は他人の涙を見ると,同情的になるよりも,いらだってくる。
3. 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると,いやな気分になる。
4. 私は友人が悩みごとを話し始めると,話をそらしたくなる。
5. 私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる。
6. 私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。
7. 私は他人が何かのことで笑っていても,それに興味をそそられない。
8. 人前もはばからずに愛情が表現されるのを見ると私は不愉快になる。
9. 私はまわりが興奮していても,平静でいられる。
10. 私は映画を見ていて,まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと,おかしくなることがある。

#### 尺度Ⅲ 感情的被影響性(5項目)

1. 私は感情的にまわりの人からの影響を受けやすい。
2. 私は友人が動揺していても,自分まで動揺してしまうことはない。(一)
3. 私は他人の感情に左右されずに決断することがで

きる。(一)

4. まわりの人が神経質になると,私も神経質になる。
5. 私は悪い知らせを人に告げに行く時には,心が動揺してしまう。

#### 4. 社会認知尺度(20項目)

以下の各項目について「全く」,「かなり」,「やや」,「どちらともいえない」,「やや」,「かなり」,「全く」の7段階評定で回答を求める。「現在の日本の社会」と「望ましい日本の社会」の2つの観点について測定した。

##### 尺度Ⅰ 社会的平等・公正・福祉(10項目)

1. 教育の機会均等の保障:保障されている—保障されていない
2. ひとりひとりを大切に教育:尊重されている—尊重されていない
3. 政治における国民の意見の反映:反映されている—反映されていない
4. 社会福祉の充実:充実している—充実していない
5. 公正な選挙:行われている—行われていない
6. 自然環境の保護:保護されている—保護されていない
7. 男女の性別による不当な社会的差別:少ない—多い
8. 公衆道徳・社会秩序:守られている—守られていない
9. 家柄や地位や貧富による不当な社会的差別:少ない—多い
10. 公正な裁判:行われている—行われていない

##### 尺度Ⅱ 社会的連帯・希望(5項目)

1. 家族のつながり:強い—弱い
2. 愛国心:強い—弱い
3. 国民の社会生活:集団同調的—個人主義的
4. 社会(国)の未来への展望:希望的—悲観的
5. 世代の断絶:小さい—大きい

##### 尺度Ⅲ 個人の自由・権利(5項目)

1. 恋愛や結婚の自由:保障されている—保障されていない
2. 信仰の自由:保障されている—保障されていない
3. 思想や意見発表の自由:保障されている—保障されていない
4. 勤労に従事し,職業を選択する権利:保障されている—保障されていない
5. 勤労者の団結権:保障されている—保障されていない

#### 5. 社会イメージ尺度(20項目)

以下の各項目について「非常に」,「かなり」,「どちら

かといえ、**「どちらともいえない」**、**「どちらかといえ**  
**ば」**、**「かなり」**、**「非常に」**の7段階評定で回答を求め  
る。「現在の日本の社会」と「将来(20~30年後)の日  
本の社会」の2つの観点について測定した。

1. 楽な一苦しい
2. 健康な一病的な
3. 安心な一不安な
4. 安定した一不安定な
5. 平和な一争いのたえない
6. 満足な一不満足な
7. パラ色の一灰色の
8. 魅力のある一魅力のない
9. 美しい一みにくい
10. 生きるに値する一生きるに値しない
11. 充実した一むなしい
12. 建設的な一破壊的な
13. 前向きの一後向きの
14. 明るい一暗い
15. のぞみのある一のぞみのない
16. 豊かな一貧しい
17. 喜ぶべき一悲しむべき
18. 幸福な一不幸な
19. 楽観的な一悲観的な
20. 暖かな一寒々とした

## 6. 価値観(生き方)尺度(16項目)

以下の各項目について「全く賛成である」、「かなり賛  
成である」、「どちらかといえば賛成である」、「どちらと  
もいえない」、「どちらかといえば反対である」、「かなり  
反対である」、「全く反対である」の7段階評定で回答を  
求める。(一)の項目は方向が逆の項目である。

### 尺度Ⅰ 愛他・自己抑制型(2項目)

1. 人間にとっては、自己の虚栄とか打算とかを越え  
た隣人愛こそが、人生の根本的な条件でなければなら  
ない。物欲、情欲、支配欲、異常な知識欲、自己  
中心主義におぼれてはならない。
2. 人生とは、感覚的に気のむくままに楽しむべきも  
のである。人生は、労働とか道徳的訓練の場である  
以上に、楽しみ場である。労働したり、善を行っ  
たりすることよりも、各自が気のむくままに生活す  
ることが大切である。(一)

### 尺度Ⅱ 受動安定型(2項目)

1. 人生においては、物事をあるがままに受け入れる  
ことが重要である。人生にとってよきものは、自ら  
求めずしてやってくるのであり、社会生活の渦に巻  
き込まれたり、人助けをしようとしたり、ひとり真  
剣に思索したりすることによって、得られるもので  
はない。

2. 人間の幸福は、求めずしてやってくるものであ  
る。求めることをやめ、静かな受け入れの態度で待  
つとき、人間は喜びと安らぎを味わうことができる。

### 尺度Ⅲ 現実社会志向型(2項目)

1. 現実の世界は、人間のすみかとしては不適當なも  
のである。それは、あまりにも大きく、冷たく、せ  
せこましい。世をすてることによって、人間は、深  
く、美しい内的世界を見出すことができる。(一)
2. 人間は、元氣いっぱい外へ向かって生きるべきで  
あり、他人と共に働いて、明るい生命にみちた社会  
生活を営めるよう、心がけなくてはならない。

### 尺度Ⅳ 能動的改善型(2項目)

1. 人生の生きがいは、障害を克服し、支配し、征服  
することに見出される。積極的で、大胆な冒険的行  
為のみが、満足を生み出す。したがって、外向的で  
精力的な行動こそ、人間の本当の生きがいである。
2. 人間が進歩するものなら、常に改良がなされなけ  
ればならない。すなわち、人間は、身体を動かし、  
冒険を行い、問題を現実的に解決し、社会をコント  
ロールする技術の改良に努めなくてはならない。

### 尺度Ⅴ 内面志向型(2項目)

1. 人間は思索や瞑想の生活を重んじなければなら  
ない。心の内部へ向けられた生活こそ、みどり豊かな  
生活である。豊かな内面生活や、感受性や、夢や、  
自己認識に、人間の真の価値がある。
2. 人間は自分の内面生活を重んじ、反省と思索によ  
って自己の生活のコントロールに努めて、おのれの  
道を歩むべきである。

### 尺度Ⅵ 積極的社会参加型(2項目)

1. 人間は、自分の外部にある物質的もしくは社会的  
な力によってのみ満たされるような欲望をつつしむ  
べきである。したがって、社会団体の活動に深入り  
したり、自然環境を欲望のままに支配したりするこ  
とは避けるべきである。(一)
2. 本来、人間は、社会的であり、積極的なものであ  
る。活発な団体活動に日々参加し、協力することの  
喜びを感ずるのでなければならぬ。

### 尺度Ⅶ 柔軟多様型(2項目)

1. 人生の目標は、いろいろな生き方の総合の中に見  
出される。人間は、さまざまな生き方によって自己  
の生活を築くべきであって、一つの生き方だけに頼  
るべきではない。
2. 人生には、様々に異なった生き方がある。したが  
って、我々は、異なった生き方をいろいろな場合に  
応じて受け入れるようにすべきであって、それらの  
うちどれか一つを唯一の生き方だと決め込んでな  
らぬ。

## 尺度Ⅷ 平穩充足型（2項目）

1. 人生は楽しみが中心でなければならない。しかしそれは熱狂的な快楽を追求するといったことではなく、素朴な喜び、たとえば、生存そのものの喜び、気持のよい環境、友人との親しい会話、休養時ののびのびとした気分といったものを味わう喜びのこと
- である。
2. 人間は、落ちついた、くつろいだ雰囲気の中で、これらを与えてくれた世界に感謝しながら、ゆっくと安住することのできる生活を理想とすべきである。